

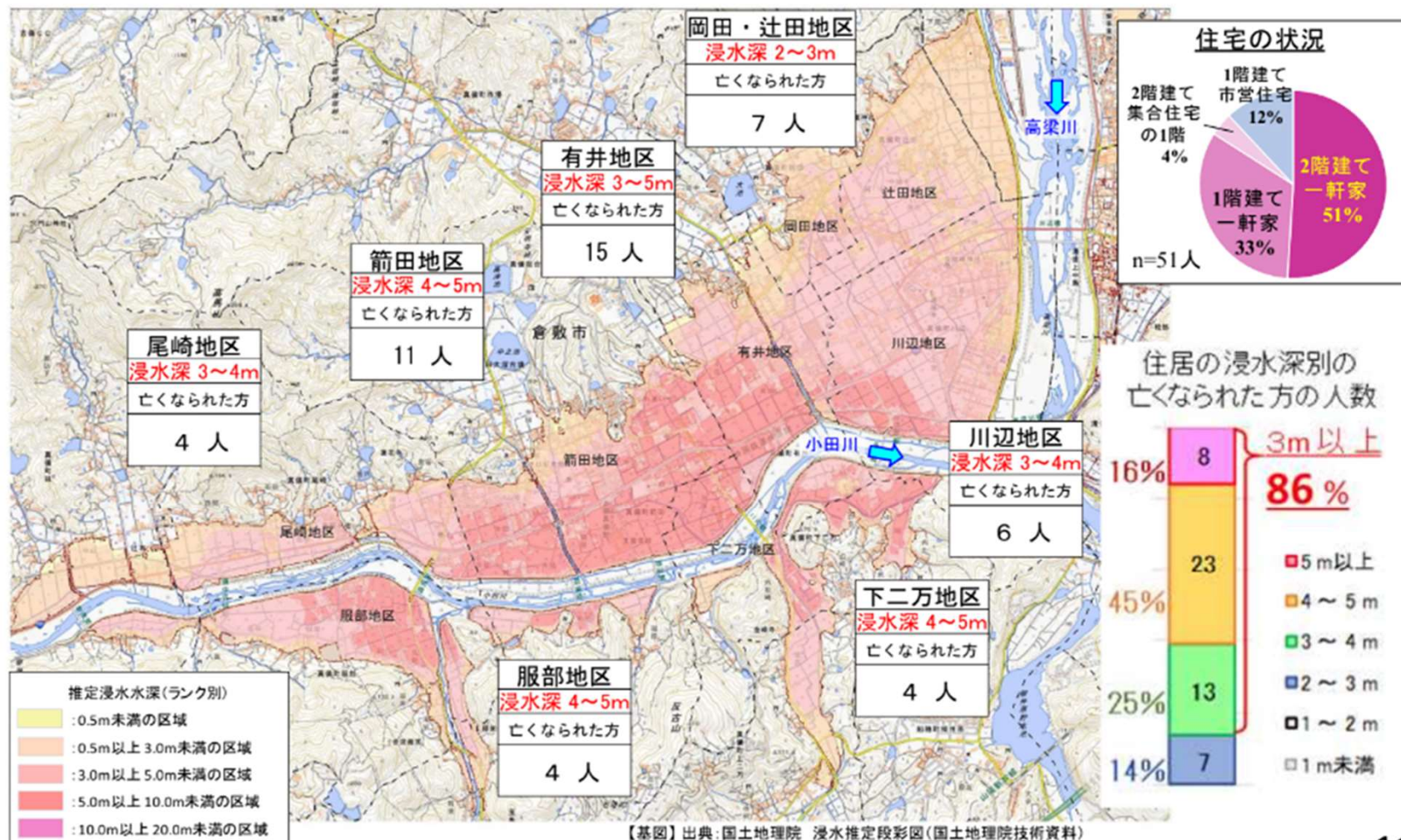
被災した古民家を再生した 災害弱者のための 復興拠点づくり

2025年6月28日 【中国地方地域づくり助成事業】報告会

特定非営利活動法人 ぶどうの家わたぼうし

2. 真備地区で亡くなられた方の情報（地区と浸水深）

○住居の浸水深3m以上（2階が浸水～水没）で約9割、浸水深2～3m（1階が浸水～水没）で約1割の方が亡くなっている



救えなかった命・・・後悔

要介護度及び身体障害の内訳(倉敷市)

要介護度	人数(割合)
なし	33(63.5%)
要支援1・2	5(9.6%)
要介護1	6(11.5%)
要介護2	2(3.9%)
要介護3	4(7.7%)
要介護4	1(1.9%)
要介護5	1(1.9%)
合 計	52(100%)

身体障害度	人数(割合)
なし	40(76.9%)
4～6級	4(7.7%)
3級	2(3.8%)
2級	3(5.8%)
1級	3(5.8%)
合 計	52(100%)



年齢階層	県内全体	うち真備町
65歳未満	12人(19.7%)	6人(11.8%)
65～74歳	17人(27.9%)	15人(29.4%)
75歳以上	32人(52.4%)	30人(58.8%)

死亡場所	県内全体	うち真備町
自 宅	44人(72.1%)	44人(86.3%)
その他	17人(27.9%)	7人(13.7%)

真備町の死者51人のうち、88.2%にあたる45人が65歳以上である。
自宅でお亡くなりになった方は44人86.3%

事業目的

豪雨災害で全壊した古民家（土師邸）を修復

- ・ 地域住民が日常のコミュニケーションの場として活用
- ・ 災害弱者との日頃からの繋がりを構築（避難時に有効）
- ・ リフォーム技術の習得、被災後の生活再建のための知識
- ・ 災害ボランティアの育成
- ・ 子どもたちへ被災の記憶を伝承
- ・ 空き家の増加抑制、有効利用

つながりが大事



被災したままの土壁



日頃のつながりの大切さ

- 分野やサービスの枠を超えた連携が大切
- 地域の組織（町づくり推進協議会、商工会、学校・・・など）との連携の大切さ
- 肩書、年齢を超えた地域の仲間という横並びの関係
- 自分たちだけでできることはあまりにも少ない。
- 地域の一員として取り組む姿勢が大切
- 被災という辛い体験だったがそれがあったからこそこの今に感謝

事業概要

1. ワークショップの開催

- ① 被災した住宅（土師邸）を使った床貼りワークショップ
 - ・被災住宅の再建について学ぶ。
 - ・炊き出し訓練を同時開催。
- ② 庭の改修整備（花壇、環境整備、ペンキ塗り）
 - ・近隣の学校、園及び地域団体、福祉事業所と協力して行う。
- ③ ワークショップやイベントを毎月開催。
 - ・住民同士顔の見える関係性の構築（災害時の避難に有効）

2. ワークショップの様子を動画撮影、発信

3. 防災拠点として活用開始

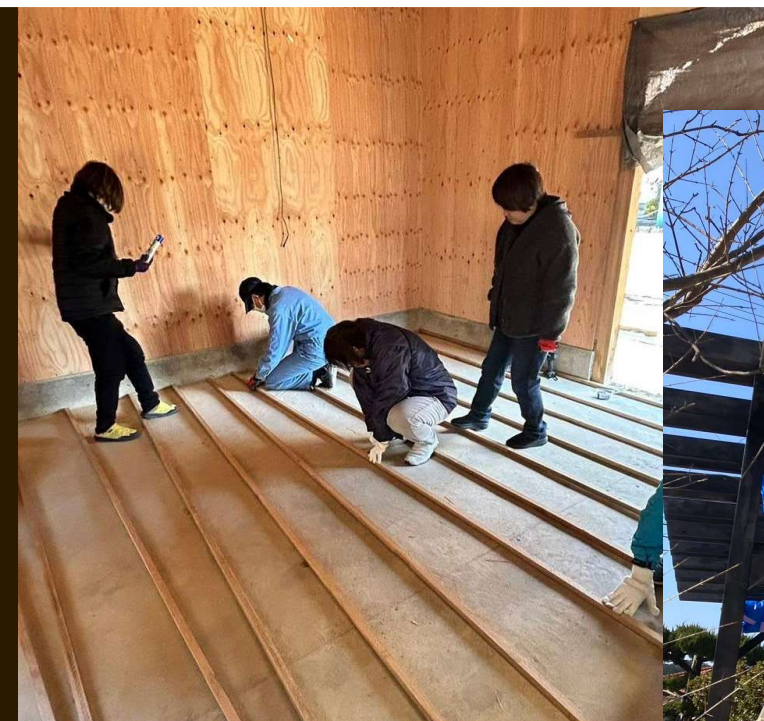
活動状況

ピザ窯体験



活動状況

床はりワークショップ



ペンキ塗りワークショップ

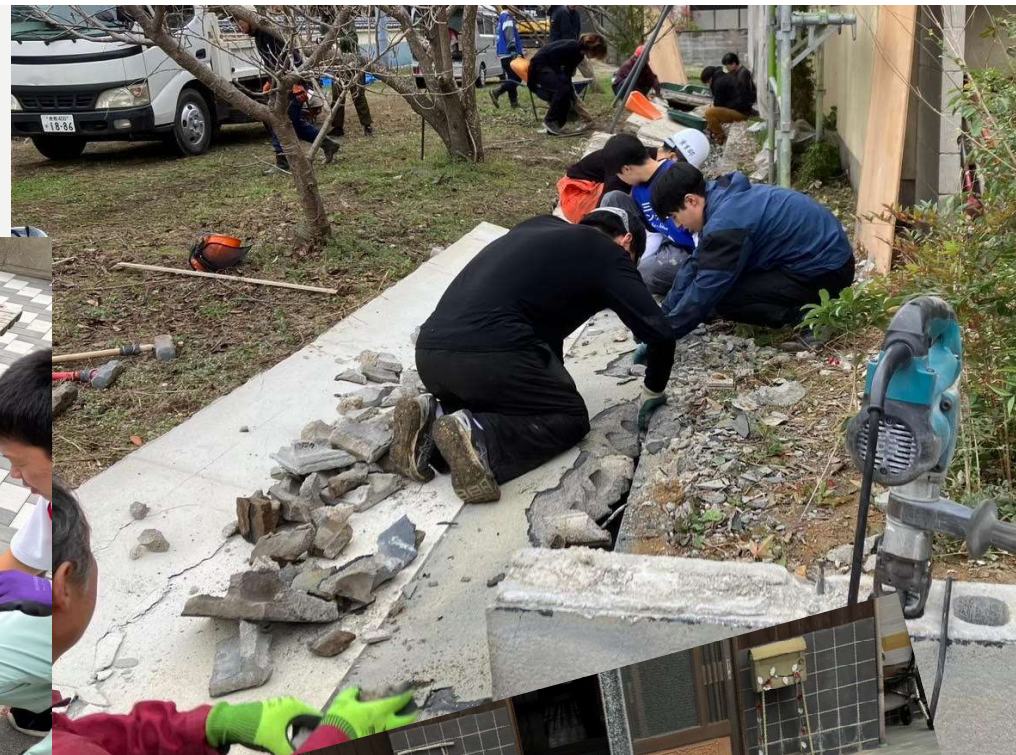
防災食作り



おせち料理作り



活動状況



花壇作り
ワークショップ



活動状況

花植えワークショップ



活動状況

お餅つき大会



事業効果

「土師邸」の開設

- ワークショップ・イベント⇒住民通しのつながり作り
- 床貼りワークショップ⇒家屋の修復やリフォームを楽しみながら学ぶ
- 地域住民による防災食作り⇒非常時の調理法の習得。
- 年齢制限、参加条件なしの開催⇒助け合いの関係作りに繋がる。

今後の取り組み

1. ワークショップの開催

①家屋の修復、リフォーム

②防災ワークショップの開催

- ・「個別避難計画」「要配慮者マイ・タイムライン」「箭田家のヘルプカード」
- ・避難について紙芝居を活用した子ども向けのワークショップ
- ・中高大学生等の若者を交えた防災勉強会
⇒「防災マルシェ」の立ち上げを目指す

2. 参加者アンケート調査

3. 動画撮影・編集

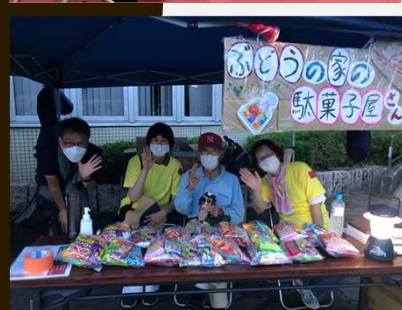
4. ワンストップの相談窓口へ



地域食堂



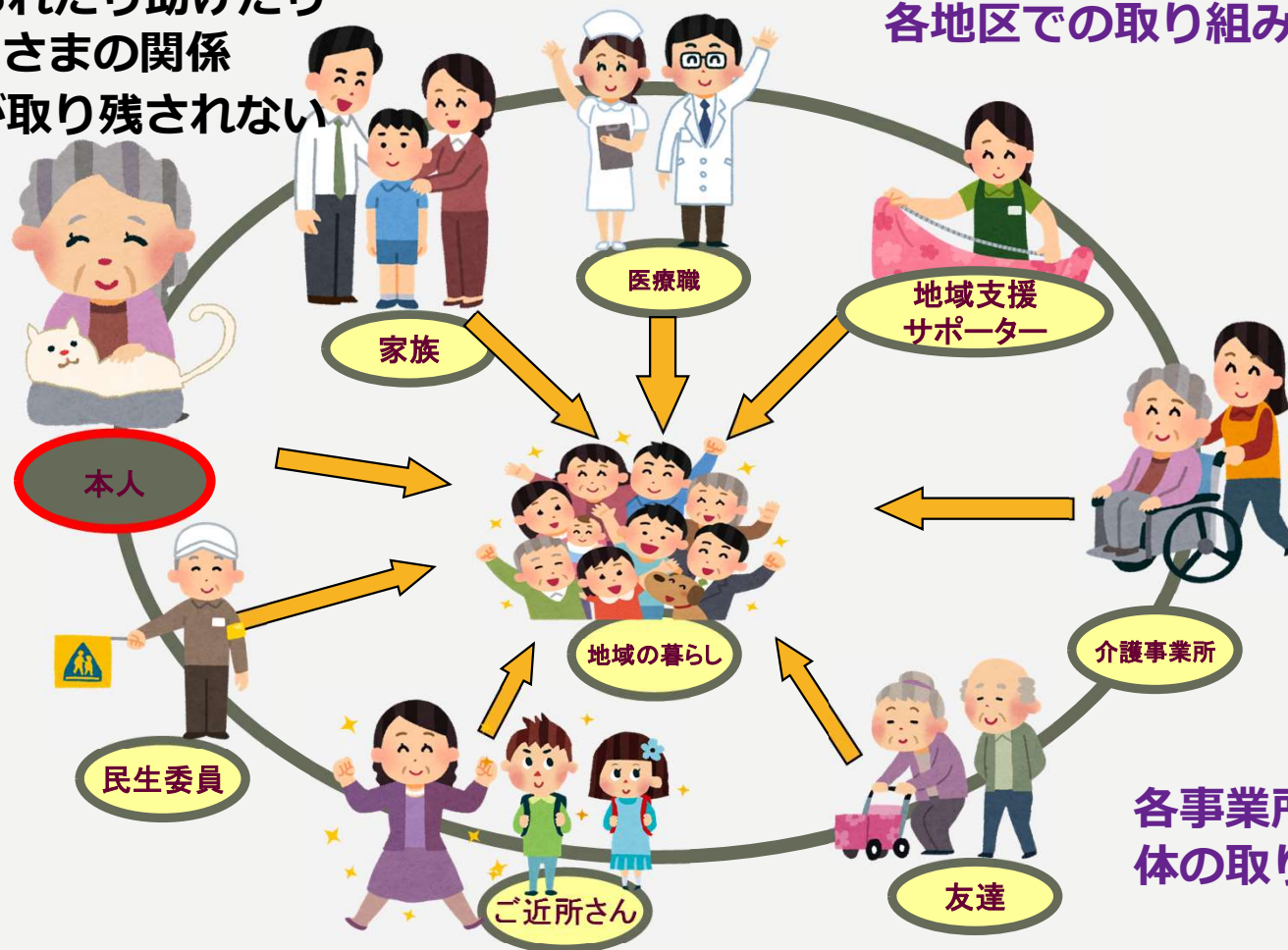
パン作り体験



すべてのひとが **どんなときでも「地域」の 構成員**

助けられたり助けたり
お互いさまの関係
誰もが残されない

各地区での取り組み



各事業所や団体の取り組み



地域の暮らしをみんなでつくる。助けてと言い合える関係を作る。
誰もが住みやすい町は、防災にも強い町。